

過酷な人生を歩んできた 人たちに休息の場を……

一山谷のホスピスケア施設「きぼうのいえ」看護主任、山本美恵さんに聞く

ときを拓く
女性たち

第81回



インタビュー

若林一美

わかばやし・かずみ

山梨英和大学人間文化学部教授。
「ちいさな風の会」代表。著書『死別
の悲しみを越えて』『亡き子へ』『自殺
した子どもの親たち』ほか多数。

“人”としての終焉を迎える手伝いを

「きぼうのいえ」は東京の一角、かつては山谷地区といわれた町のなかにあるホスピスケア施設だ。山本美恵さんは、看護主任として夫である山本雅基施設長とともに、このホスピスの実際面での責任者として活動をされている。

ホスピス（hospice）という言葉は、高齢化の進む日本社会のなかで、がん末期の人たちの生を、最後の瞬間まで支えるシステムとして広まり、現在では多くの人たちに知られるようになっていく。今回山本さんにお目にかかり、お話をうかがうなかで、近代的なホスピス運動の創始者であるシリール・ソンドラス先生と初めてお目にかかったときのこと 생각이起こされた。

一九七〇年代の末、今から四十年近く前のことである。一九六七年に設立されたロンドン郊外にある聖クリストファー・ホスピスの一室で、ソンドラス先生はこんなふうに語られた。

「ホスピスは今、末期の患者さんの生を支える場所として認識されていますが、それは狭い意味でしかありません。私は『愛の共同体（コミュニティ）』だと思っています」

その当時、日本社会ではまだ「ホスピス」という言葉が市民権を持っていなかった時代だ。その後、末期がんの患者たちの痛みなどに焦点をあわ

せたホスピスや緩和ケア病棟などが日本各地に広がり始めることになるのだが、その多くは医療の発想からスタートしたものだ。

山本夫妻が開設した「きぼうのいえ」は、ホスピスとはいっても医療機関ではない。宿泊所という位置づけで、行き場を失った病氣や障がいを抱えた高齢者たちの終の棲み処として、山谷の町のなかに小さな灯をともしている。そしてそのことが、むしろ「ホスピス」そのものの原点に近いものと思われたのだ。

「きぼうのいえ」は、二〇〇二年十月に開所された。このころ、ホスピスの開所を決め、行動に移すまでの日々は、山本美恵さんにとって、自身自身の人生が大きく揺らいでいた節目の時期と重なっている。

「高校時代、将来は人を助ける仕事につきたい」と言っていた心やさしい親友が、急逝してしまいました。彼女の生前の言葉が忘れられず、看護師になりました。都内の病院勤務を経て、医療関係の雑誌の編集者として働いていました。充実感のある仕事でしたが、ふと気付くと二十年以上、がむしゃらに仕事中心の人生をおくっていたのです。ちょうどそのころ、長く付き合っていた恋人が、突然の事故で亡くなってしまいました。

愛する人の死という大きな喪失を体験し、人は何のために生きるのだろうか。死ぬとどうなるのだろうか。——そんな堂々巡りの問いのなかで、

すべての人々に尊厳ある命の灯を
行き場を失った人々・孤独老人のホスピスケア施設

特定非営利活動法人(NPO)
山谷・すみだリバーサイド支援機構

〒111-0022 東京都台東区南川2丁目29-1
Tel 03 (3875) 7523 Fax 03 (3875) 752
E-mail: kibounoie777@mbm.nifty.com
URL: http://www.kibounoie.info/



Hope House
きぼうのいえ

身もたえる日々が始まったのです。自分に生きる意味があるのか、そんなふうにも思いました」

悩みの中にあったある日、通勤途上で出会ったホームレスの姿が思い起こされた。朝夕のラッシュ時、駅の近くに居を置くその人は、踏みつぶされそうになりながら、ひっそりと暮らしていた。たくさんの人たちが行きかう路上で、そこを通る人たちの多くの目には存在すら見えないようだった。

あるとき、とてもおなかをすかせているように見えるその人に、山本さんはコンビニで買ったおにぎりを届けた。差し出がましいことではないか、プライドを傷つけ、おこられるのではないかな……等など、いろいろなことが頭に浮かび、行動に移すのは勇気が必要だった。おにぎりを手渡すと、その人は思いがけないほど率直に感謝の気持ちを返してくれた。

「迷うことがあったら、行動してみよう。思う

ように生きてみよう、と考えるようになったきっかけとなる出来事でした。マイナスのことを想像したり、計算したりしては何もできない。ともかく何か一歩ふみだしてみようと、上智大学の「ホスピスボランティア」講座に参加しました」

そこで出会ったのが、夫となった山本雅基さんだった。彼は「ホームレスのホスピス」を作りたい、という夢を熱く語っていた。

日本が高度成長の号令のもと、一鴻千里にかけ続けていた昭和三十年代、その景気の実質的な下支えをしていたのは、地方から上京し、工事現場に派遣される日雇い労働者と言われる人たちだった。その人たちの多くが安い本賃宿のある山谷地区に暮らしていた。宿泊料が安いことはメリットだが、環境が良いとは言えず、「宿(ヤド)」といえるような代物ではない、という自嘲的な意味を含め、いつしか「ドヤ」とよばれるようになり、当時山谷は「ドヤ街」と言われていた。

その山谷には、様々な人が集まってきていた。そして今もここに暮らす人の多くは高齢化した。日本経済が低迷したこともあるが、高度経済成長を支えた世代の人たちが、病氣やけがのために動くこともままならず、ドヤや路上でひっそりと息を引き取っていたのだ。

山本さんの「人としての終焉を迎える手伝いをしたい」という考えに共鳴した美恵さんは、生涯の伴侶として雅基さんと共に歩む決意をした。

無謀ともいえる「ホームレスの人たちのホスピス」の建設計画がスタートする。資金の元は、美恵さんの貯金と一億円近い借金。場所は、地域の反対運動などで二転三転し、結果としては最適な場所、山谷に四階建ての施設が造られた。

「きぼうのいえ」の名称は、すべて平仮名表示になっているが、利用者のなかには文字が読めない人がいることを配慮したものだ。

十月で丸七年、看取った人は、九十八人になる。五畳ほどの広さの個室が二十室、看護師ふたりを含め、常勤とボランティア四十数名のスタッフが交代で勤務にあたっている。週一回は医師の往診、痛みを取り除くための処方が行われているが、費用のすべては、入居している人たちの生活保護費と寄付で賄われている。

ささやかで、かけがえのない
願いに、ていねいに向き合って

開所と同時に待ちかねていたように人が押ししか



けてきた。入居してくるのは福祉事務所などからの紹介で来る人がほとんどだが、基本的には部屋が空いている限り、拒むことはない。家族はなく孤独に暮らしていた人たちが、老いに加え、がんやHIVといった治ることの難しい病気、認知症などを抱え、どこにも居場所を見つけれずにいたのだ。

「自業自得と言う人もいますが、生い立ちや、経済的な変化など、本人の努力ではどうにもならないものを背負った人が多いです。なかには裏稼業に身を置いていた人もいますが、私たちスタッフは基本的にご本人が話してくれることは聞きませんが、話したくなさそうなことを聞き出したり、それ以上入り込むようなことはしていません。

たとえば、過去にどんな人生を歩んできたからと言っても、法律に触れるような仕事についていたからと言っても、それはここでは関係ないように思います。むしろそんな『語りたくない過去』を過ごしてきたからこそ、刹那の出会いかもしれないかもしれませんが、精一杯のお世話をさせていただきたいと思います。

人として生まれ、人として最後を過ごす手伝いをしたい、と」

なかには暴言をはき、暴力をふるう人もいます。なかには好意と思ってしたことが届かないこともある。あたたかなベッドで眠ることがよい、という考えが必ずしもだれにでもあてはまることでは

ないことも体験した。幼いころに両親を失い、ある意味では愛される体験を持たぬまま八十年近くの人生活きてきた人もいます。悪態をつくことしか自己表現の術を持たない人もいます。人にさげすまれ、愛情に飢えていたとしても、「さみしい」という言葉すら口に出すことのできない日々を送ってきた人たち。

……こういった様々な人との出会いを通して、美恵さんは、

「おじさんたちを見ると、その人の言葉や行動には、その人なりの理由があるのだ、ということがわかってきました。私には想像もつかないような経験をして生きてきた人たちに對して、自分の判断、善悪をあてはめてはいけない、ということに気がきました」

美恵さんの話をうかがったのは、最上階にある礼拝堂、お骨が安置してあるスペースだった。中央にある祭壇の周りには、ぐるりと亡くなった人たちの遺影が額に入れて置かれている。この一週間にふたりの方が亡くなり、ひとりはずぐに家族のもとに引き取られて行ったが、もうひとりのお骨は、東北に住む親類が上京するのが難しいというので、近々スタッフが、お骨を届けに行くのだと言う。

「引き取り手のあるのは少なく、死を看取るなかで、お墓の必要性にも気付いてきました。はじめのころは、教会の方たちの好意でお骨を納めて



いただいていたりもしたのですが、数が増えていくなかで、やはり自分たちのお墓が必要だと考え始めたのです。

お墓を購入する条件も厳しいものですね。私たちは家族でもありません。相続をする人もいないお骨を引き受けてくれる墓地というのはなく、とくに東京は料金的なこともあつて無理でした。結局、私の故郷の長野県伊那市にお墓を購入することができました」

昨年十一月に、三十一人の人たちのお骨を納め、彼らの安住の地を見つけたことに安堵したという。お墓の話聞きつけたある山谷の住人が、「自分たちは生きていてもホームレス、死んでもホームレス。行くところがあつてうらやましい」ともらしたという。

年間に十六ー十八人くらいの人の死を看取ってきたことになる。美恵さんにつらくなることはないか、とうかがった。

「ここは行政からの援助を受けていないため、財政的には厳しい側面もあるのですが、反面、様々な規制を受けずに自由にいろいろなことができます。死も人生の一部。ときには笑い話のよう

なことも起こります」

自分の自由になるお小遣いはひと月五千円程度、あるひとりの入居者の人が二十五年前に出たきりになつてゐる故郷を見たいと言いだした。

その人と仲の良いボランティアとふたりで相談し、なんとか飛行機代を捻出しようという話になった。スクラッチの券を買って資金の千円を稼ぎ、それを元手にふたりで、パチンコをし、ふるさとまでの交通費をかせぎだしたのだと言う。結局その人は、そのボランティアとふたりで故郷行きを果たした。奇しくもその日は自分の母親の命日で、彼は二十五年ぶりの墓参りもすることができたのだと言う。

末期状態の人が飛行機代を捻出するために必死にパチンコをする姿。その隣にはやはり真剣なボランティアの姿が重なる。

その人らしい思いは様々だ。

「死ぬ前の願い」も、その人の記憶と思ひ出のなかにある。

末期になり、食欲も落ちた老人にジャガイモの味噌汁を届けるスタッフがいた。老人が小学生のときに食べた母親が作ってくれた味噌汁の味が忘れられない、という話を思い出したからだ。

軽い痴呆もあり、食事を受け付けなかったその人が、ジャガイモの味噌汁を大さじ三杯ほど口に、「お母さんの味噌汁は一生忘れられるものではない」と涙を流す。

小さく、ささやかな願い……それだけにかけがえない思いに美恵さんたちスタッフはいいねいに時間をかけて向き合っていく。

その人たちと一緒に歩むことから、美恵さんたちも、死のなかにある悲しみから生まれる何か光のようなものを感じているのかもしれない。

かたくなに人を拒否することしかなかった人が、死の床で、自分の手をまさぐるようにして握ってくれたことなど、それはスタッフにとつても心にしみる人と人とのつながりを心に刻む出来事となる。

死と向き合うなかで生まれた人のぬくもりと可能性のなかで、山本さんは仕事ができる幸せを語る。

ヨーロッパを旅すると様々なホスピスがある。アルプスの山ろくには、吹雪で行き倒れた人を、大きなセントバーナード犬と共に救出したホスピス。中世の原野をとどめるバリトリヨンのなかほどにあるポーヌのホスピスは巡礼者や十字軍の傷ついた兵士たちに休息を与えるためのものだった。そして今山谷のホスピスも、過酷な人生を歩んできた旅人たちに無条件の休息を与える場として、ささやかで、それだけに貴重な働きを続けている。

●ご支援のお願い——《郵便振替番号》00130-3-664844 加入者名 山谷・すみだリバーサイド支援機構 宛て、寄付ご送金いただけますと幸いです。